英　語　科

英 語 科

コミュニケーションの質の向上を図る学習指導の工夫

～ 他者との協働を大切にして，主体的に課題を乗り越えようとする生徒の育成 ～

蓬　澤　　守
小　内　貴　司
池　田　翔　吾

1　研究主題

(1) 本校英語科のこれまでの取組

平成 29 年度から令和４年度までの教科研究の概要を**資料１**に示す。

資料１　平成 29 年度以降の英語科の研究内容

研究期間	研究の主な内容
H29.6 ～ H30.5	コミュニケーションの質の向上を図る学習指導の工夫 コミュニケーションの相手を尊重し，伝え合い，わかり合うことを大切にする場面の設定 情報や自分の考えなどを形成するとともに，必要に応じて，整理，再構築する場面の設定
H30.6 ～ R1.5	コミュニケーションの質の向上を図る学習指導の工夫 「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点を位置付けた，意図的・計画的な授業実践 単元・題材の学びの見通しをもたせた学習と，その学びの振り返り
R1.6 ～ R2.5	コミュニケーションの質の向上を図る学習指導の工夫 対話的な学びを通して，思考力，判断力，表現力等をのばす 対話が必要となる「問いの工夫」と，その学びの振り返り
R2.6 ～ R3.5	コミュニケーションの質の向上を図る学習指導の工夫 思考力，判断力，表現力等を中心とした資質・能力の育成のための単元・題材の指導 生徒が自らの学習の評価を基に，学習を改善することのできる形成的評価の実践
R3.6 ～ R4.5	コミュニケーションの質の向上を図る学習指導の工夫 個に応じた指導の視点に基づいた，生徒の「挑戦心」を引き出す学習指導の工夫 生徒自らが自己の変容を振り返り，学び続けられるような「個別最適な学び」の工夫

(2) 本校英語科の本年度の研究主題

コミュニケーションの質の向上を図る学習指導の工夫

～ 他者との協働を大切にして，主体的に課題を乗り越えようとする生徒の育成 ～

本校の研究主題「挑戦心を育む『令和の日本型学校教育』の実現」を受け，本校英語科では研究主題を上記のように設定した。

第二言語習得研究におけるコミュニケーション能力の定義（Canale & Swain，1980）には，「文法能力」（grammatical competence），「社会言語能力」（sociolinguistic competence），「談話能力」（discourse competence），「方略能力」（strategic competence）の四つの構成概念がある。本校英語科では，中学校学習指導要領（平成 29 年告示）を踏まえた上で，生徒のコミュニケーションの質の向上を図るために，特に，意味内容のつながりや論理の一貫性，相手とのやりとりを考慮し，まとまりのある文章や会話を理解したりつくり上げたりすることができる「談話能力」，コミュニケーションの過程で生じる様々な問題に対処し，コミュニケーションを円滑に進めるための「方略能力」の二つの能力の育成について取り組んでいくこととした。

また，他者との協働的な学びの場面において，「理解したり表現したりすることが難しい内容

でも，相手に応じて既知の言語材料を使い分けることやコミュニケーションを図ろうとしている」姿に，生徒の「挑戦心」が表れていると考えた。このような態度を意図的・計画的に育成していく必要があると考え，前述の副題の設定に至った。

２　研究内容

中学校学習指導要領解説外国語編では，「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」は以下のように示されている。

外国語で表現し伝え合うため，外国語やその背景にある文化を，社会や世界，他者との関わりに着目して捉え，コミュニケーションを行う目的や場面，状況等に応じて，情報を整理しながら考えなどを形成し，再構築すること

授業において，外国語科における「見方・考え方」を働かせながら効果的に資質・能力を育成するとともに，理解したり表現したりすることが難しい内容でも，何とかして他者とコミュニケーションを図ろうとする態度も育成できるよう，以下の二つの重点を基に研究主題に迫った。

【重点１】　困難に向き合い，試行錯誤するなどの挑戦する学びの場面の設計 **【重点２】　教師や仲間との協働的な学びの充実の手立て**

(1)　**【重点１】**について

挑戦心が表れている生徒の姿の例として，「理解したり表現したりすることが難しい内容でも，相手に応じて既知の言語材料を使い分けることやコミュニケーションを図ろうとしている」姿を挙げたが，これを達成するためにはそもそもの課題設定の場面から，生徒自身が「伝えたい」と思い，取り組ませることが重要であると考えた。

具体的には，活動時に目標を提示するのではなく，単元開始時に単元を貫く目標の共有をすることが挙げられる。既知の英語表現を駆使し，単元の最初に終末の活動に取り組ませることで，自分自身の意思を伝達する際に，必要となってくる事項を体験的に感じ取らせることで，学ぶ目的を自発的に生み出すことができると考えた。

また理解が難しい内容については，「前後関係等，文脈から内容を推測する」や，「複数回聞き直しや読み直しをする」，やり取りが可能な場合には「聞き返す」や「わかりやすい表現での言い直しをお願いする」という対応が考えられる。さらには表現が難しい内容については，「英語の語彙や表現方法が思いつかない場合には，先に日本語自体を英語で表現しやすいように言い換え，その後相手の理解の様子もうかがいながら英語で表現する」，「ジェスチャーや表情等の非言語コミュニケーションを活用する」，やり取りが可能な場合には「相手が内容を正しく理解するまで複数回伝達する」や「質問をし合うなどして情報を補い合う」という対応が考えられる。

上記を踏まえ，学習前に挑戦した事項を記録し，学習後に再度取り組んだ事項とを比較し，振り返りを行わせることで，学びを視覚化でき，効果的に学習が深まっていくようにしている。

(2)　**【重点２】**について

「個別最適な学び」の充実のためには「協働的な学び」の場面は重要である。自己の学びを他者との協働により振り返る機会を意図的に設定することで，その結果集団の学習の質も高まっていく。具体的には自分の考えを伝える際に，他者にどのように伝えていたか（伝達方法）や内容は適切であったか（内容）など，自分がその場ではなかなか意識が向きにくい事象について，第三者から助言をもらうことにより，どのような工夫をすれば質の高い学びにつながるか生徒に考えさせるとともに，ワークシートの工夫やＩＣＴ端末の活用により，自ら進んで振り返り，次の挑戦につながる支援ができるようにしている。

また，単元や学期末に実施するパフォーマンステストについては，生徒が納得のいくまで再挑戦できるように実施時期に幅をもたせることで，生徒の学習意欲を高めるとともに，より正確な総括的評価を行うことができるようにしている。

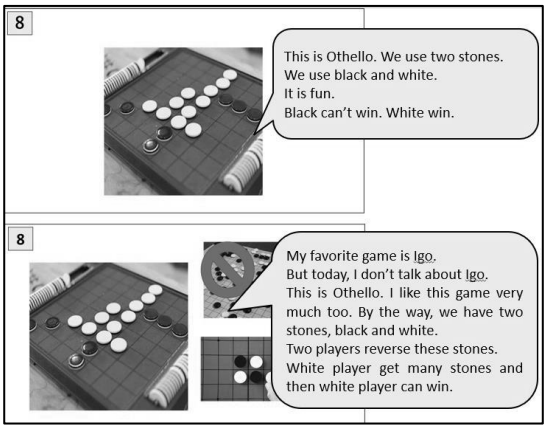
３　研究の実際

(1)　【重点１】困難に向き合い，試行錯誤するなどの挑戦する学びの場面の設計

実践例：単元を貫く目標を基に，相手に効果的に自分の考えを英語で伝える工夫および実践

ある単元において，単元を貫く目標として「自分自身のことをもっと知りたいと思っているＡＬＴに対して，人物やものの紹介を通し，自身の考えや気持ちを英語で伝達する」という目的や場面，状況の設定を行った。単元の最初において「既習事項を活用し何とかして伝達する場面」を設定し，プレゼンテーションソフトで写真を示しながら発表させた。**資料２**はその生徒が実際に使用したスライドである。

資料２ 生徒が作成したスライドおよび表出された文章
（上段は第１時のもの，下段は最終時のもの）



発表は動画に収め，学習後に見返せるようにした。この活動を生徒に取り組ませることで，うまく伝達できたことやできなかったことなどを学習前から自覚させることに繋がった。そのため単元で学ぶべきことが明確となり，学習過程においても生徒は単元を貫く目標を達成するためにできることを常に考え，取り組む姿が見られた。単元の終末には，再度同じ活動に取り組ませ，学んだことを活用し，効果的に発表するために工夫する生徒が多くいた。自身の考えを整理することや発表においても，ただ準備した原稿などを読み上げるのではなく，自分の話したい内容を明確にさせた上で発表させた。**資料２**の英文は実際に生徒が発話した英文である。多少の英語のエラーは散見されるが，単元の最初と最後の姿が生徒も自覚できるような単元設計にしたことで，生徒が主体的に単元の学習に臨む姿が見られた。結果として単元末の発表時には，発表を聴く他者（ＡＬＴなど）が質問をした際には，原稿をただ準備し読み上げた時以上に，相手の気持ちや考えを聞き取り，正対して答えようとする姿が多く見られた。

(2)　【重点２】教師や仲間との協働的な学びの充実の手立て

実践例：英語による意見交流を行いながら，自己の考えを整理，再形成や再構築し，英語で表現するための活動の工夫および実践

ある課題を与え，思考ツールを活用し，英語を用いながら自分の意見を整理させることや，英語を用いた他者との交流の場面を意図的に設定したことで，より自分の意見が洗練され，自信をもって他者へと伝達することに繋がった。以下のア～カの手順で行った。

ア　課題をもとに，指定した時間でBrainstorming Sheet（**資料３**）を活用して，考えをまとめる。

イ　隣の座席の生徒へ指定した時間内で考えを英語で伝える。ここでは発表の形式とし，一方の生徒が発表している間はもう一方の生徒は聴くようにさせる。その際，自分の考えにない新たな考えがあった場合，別の色のペンで自分のシートに加筆する。

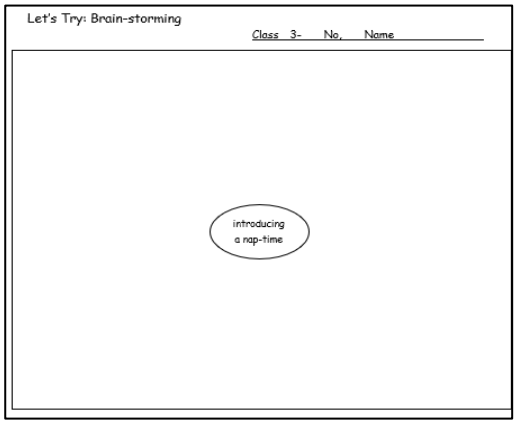
ウ　ペアを変え，同じ活動を行う。

エ　再度ペアを変え，４人一組のグループを作り，英語を用いて課題に対する自分達の意見の交流を行う。

オ　グループを変え，同じ活動を行う。

カ　終了後，英文で自分の考えを書いてまとめる。

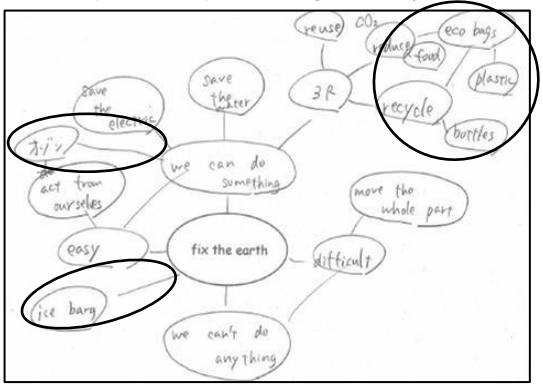
資料３ Brainstorming Sheet



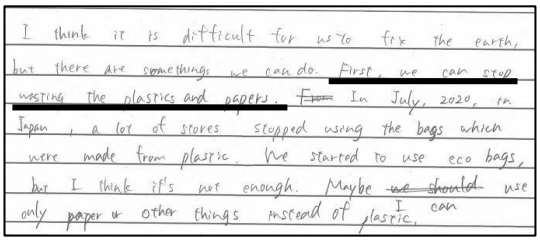
英語で意見を伝達する際，従来は自分の考えを英語で書き起こした上で，それを他者へ伝達することや伝達した内容を英語で書き起こすことが多かった。この方法では，考えが生まれない生徒やまとまらない生徒は，自分の考えを表出することが難しかった。思考ツールを用いて，自分の考えを他者との英語でのやり取りの中で伝達し合う場面を設定することで，思考が整理され，生徒自身の考えを英語で表現することに繋がった。最初は既知の知識で書ける内容や英語の表現

のみが並び，思考の広がりはあったが，深まりが浅かった。英語でのやり取りから，他の意見とのつながりを確認し，加除修正を図りながら思考の過程を整理する様子が見られた（**資料４**）。活動を経たグループ内の意見交流では，他者の意見が出た時に，自分の考えと関連させ，相手に伝達し直す姿も見られた。グループ内の仲間も，意見交流する過程で生徒Ａの意見を生徒が持つ思考ツール上に加筆する姿も見られた。なお**資料５**は最終的に生徒Ａが記述した英文である。元々「何かしたい」という考えがあった様子は**資料４**から読み取れるが，なかなか具体的な手立ては見られなかった。しかし**資料５**における下線部以降の英文から読み取るに，plasticやeco-bagsなどの英文から，仲間とのやり取りから得た意見を活用し，自分の意見を効果的に表す姿が見られた。漠然としていた考えが「協働的な学び」の場面を設定したことで明らかになり，自分の意見が再構築され，他者から得た意見等も含め，まとまりのある英文となって表出したと言える。

資料４ 生徒Ａの思考を整理した様子
（白黒のため、○は加筆個所を表す）



資料５ 生徒Ａによる記述の様子


I think it is difficult for us to fix the earth, but there are somethings we can do. First, we can stop wasting the plastics and papers. ~~From~~ In July, 2020, in Japan, a lot of stores stopped using the bags which were made from plastic. We started to use eco bags, but I think it's not enough. Maybe ~~we should~~ use only paper or other things instead of plastic. I can

４　研究の成果と課題

外国語によるコミュニケーションの質の向上を図る工夫として，二つの重点を基に，授業改善に取り組んできた。

【重点１】「困難に向き合い，試行錯誤するなどの挑戦する学びの場面の設計」については，目的や場面，状況等を明確にした上で，単元を貫く目標を設定した。そして第１時に目標となる資質・能力を発揮させる活動に取り組ませることで，生徒は自身の意見を伝えるために，相手に応じて既知の表現方法を選択し，伝達する経験を得ることができた。これにより，学習前から足りないことやできていることの自覚化につながり，より一層，単元の学習に主体的に取り組む原動力，いわば挑戦心の育成に寄与したと捉えている。一方で，教師が設定した目的，場面や状況等の難易度によっては，生徒が伝達しなかったり，内容を理解しようとしなかったりするなどのコミュニケーションへの意欲の低下が見られた生徒もいた。

【重点２】「教師や仲間との協働的な学びの充実の手立て」については，教師から生徒，生徒同士，生徒自身の振り返りなど活動形態の工夫や，思考ツールやＩＣＴ端末等を活用した変容の可視化および蓄積によって，生徒一人一人が自らの課題を把握し，改善に向けて取り組む様子が見られた。例えば，自分の意見等を即興的に他者へ伝達する活動を行うことや生徒が発した英語を意識的に振り返る活動を行うことで，育成すべき資質・能力の育成へと効果的に結び付いていると考えられる。

個に応じた指導の視点に加え「協働的な学び」の視点をもとに授業を組み立てることにより，生徒一人一人の挑戦心を一層引き出すことにもつながり，その結果生徒の資質・能力の育成に結びついていると考えられる。今後も「個別最適な学び」と「協働的な学び」との往還を大切にし，日々の授業内での生徒一人一人に対する適切な形成的評価も活用しながら，「学習の個性化」の充実についても一層研究を行い，工夫した単元計画の開発を進めることで，生徒の資質・能力の育成に努めていきたい。

＜引用・参考文献＞

文部科学省（2017）『中学校学習指導要領解説　外国語編』.

Canale, M., & Swain, M. (1980). Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing. *Applied Linguistics*, 1, 1-47.

Ellis，R．(2003)．*Task-based Language Learning and Teaching.* OUP

埼玉大学教育学部附属中学校（2018，2019，2020，2021，2022）『教育研究』（第 67，68，69，70，71 号）.